

「課題が多い金融機関のリスク管理システム」

『金融ジャーナル』2000年6月号 P.66 - 67 -

株式会社 メッセージ

吉野正康

1. リスク管理の現状

金融機関は、リスクの請負、仲介機能により、その業を営んできた。近年の大手金融機関の破綻を目のあたりにすると、リスク管理の重要性を改めて痛感する。BIS規制により、市場リスクのVaRによる計測は多くの金融機関で行われているが、信用リスクに関しては、計量化の試みが始められたばかりである。組織上の問題もあり、運用関連部署で市場リスク、融資関連部署で信用リスクが管理され、本来統合して管理すべき銀行勘定、あるいは保険・年金勘定の全資産、負債のリスクの管理は、一部の金融機関でしかできていない。

2. リスク管理システムの要件

(1) 統合リスク計測

ディーリング勘定のみ市場リスク、信用リスク統合管理や、融資、保証のみの信用リスク管理では、全社のリスクを管理していることにはならない。未対応項目として、市場リスクでは、公社債、政策株式、固定長期融資、不動産、調達側での定期預金、保険、年金などがある。信用リスクでは、社債、転換社債、政策株式がある。プリペイメントリスクとして、住宅ローン、定期預金、保険、年金がある。また、リスク管理が個別リスクごとに行われているが、市場変動が起こらずデフォルトのみ発生する世界も、市場変動のみでデフォルトが発生しない世界もない。リスクは同時計測、管理して意味を持つものであり、組織上の問題を口にしても、何の解決にもならない。

特に銀行勘定、保険・年金勘定のリスクを統合計量化するためには、従来のVaR計測を拡張するだけではできない。まず、証券化が進展しているとはいえ、流動性が少ないことから計測期間(ホライズン)を長期化する必要があること、長期化することにより、資産、負債の入れ替えによるフロー資産、負債を対象に加える必要がある。また、時価評価のための無裁定な、金利、株式、為替、不動産モデルも必要になる。

(2) 運用支援システム

現状は、リスク計測がリスク管理の目的となってしまうている。VaRの値を計算するだけのシステムが多い。しかし、リスク管理の本来の目的は、リスクをコントロールしながら、資産の運用支援ができることである。当然、運用スタイルは調達スタイルによって異なるべきであり、この意味でも運用、調達の統合リスク管理は必要最低限のことである。「調達なくして、運用なし」。最終的には、リスク調整済調達コスト(資本コストも含め)を考慮して、いかにリスク調整済利益を最大化できるかにつきると思える。システム要件としては、調達側リスクである市場、プリペイメント、決済性リスク(資金調達リスク)を計量化することであり、運用側リスクである市場、信用、プリペイメント、流動性リス

ク（大量売却時の市場インパクト効果など）の計量化と、運用調達込みの損益変動リスクの計量化ができること。この計量の際には、新規調達運用の政策シミュレーション機能（高度なALM機能）を持つべきである。

（３）正規分布からの脱却

リスク計量化システム、特に市場リスクの場合は、正規分布（あるいは対数正規分布）が前提となっている。リスク計測は、そもそもまれに発生するイベントに対する損失を計量するわけであり、ファットテール現象（大きな変動が発生する確率は、正規分布よりも頻度が高い）は「公知の事実」ともいえる。今までは、特定のシナリオ評価機能である、ストレステストにより対応してきた。今後は、さらに不均一分散モデル、確率ボラティリティモデルなどの採用の必要もあろう。

（４）我国固有の問題に対応可能

固有の問題として、融資での短期、長期プライム運用と、短期融資、定期預金等のロールオーバー性向を取り扱う必要がある。今までは、リスク管理システムは海外のシステムがほとんどであったが、ローカライズの必要性、保守問題等から国産の優秀なシステムが台頭してきている。グローバル化の過渡期にある現在、当分、固有問題の対応も必要となる。

３．最後に

金融機関の統合化により、今後増えるであろうIT部門の投資が、顧客DBの整備だけでなく、リスク管理部門にも向けられ、世界に誇れるリスク管理システムが国内で開発されることを願っている。

以 上